

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：62601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02516

研究課題名(和文) 幼児期・幼小接続期における集中没頭・弛緩発散と社会情動的スキルの検討

研究課題名(英文) A study on the relationship between involvement/concentration and relaxation/release and social emotional skills in early childhood and in the transition period from pre-primary to primary school

研究代表者

堀越 紀香 (HORIKOSHI, NORIKA)

国立教育政策研究所・幼児教育研究センター・総括研究官

研究者番号：80336247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自然観察を通して3歳児から5歳児の集中没頭する姿を縦断的に捉えて事例を整理し、発達の特徴について検討した。以下のような集中没頭の発達の特徴が見られた。3歳児は、一人で取り組んで楽しむ、物に関わって短時間集中して繰り返し遊ぶ事例が多く見られた。4歳児は、仲間と一緒に遊ぶ事例が多く見られ、製作遊びや積木遊びで集中没頭が持続していた。保育者は見守ったり声かけしたり環境を整えていた。5歳児は、仲間と一緒に遊んで盛り上がり、協同して遊んでいた。試行錯誤や工夫をして、集中没頭が持続していた。5歳児3学期には、行事を計画して進めようとする姿が見られ、保育者も周囲に紹介して、遊びを広げていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

3歳児から5歳児まで縦断的に観察した事例から、近年着目されている社会情緒的スキルと関連する幼児の集中没頭を取り上げた点や、集中没頭の発達の特徴について整理した点に学術的意義があると考えられる。個人差を考慮する必要があるが、幼児期の集中没頭する姿や集中没頭が生じた場面等を分類したことによって、「やりたい」思いや主体性を大事にしながら、集中没頭を生み出す遊び・活動、環境構成の工夫、仲間の存在、保育者の援助を具体的に提示でき、その重要性を示唆した点は、社会的に意義があるだろう。また、集中没頭のためには、弛緩発散も必要であることに触れている点もポイントである。

研究成果の概要(英文)：In this study, we longitudinally captured and analyzed cases of concentration and involvement of 3- to 5-year-old children through nature observation, and examined the developmental characteristics of the children's concentration and involvement. The following developmental characteristics were observed.

The 3-year-olds enjoyed themselves by playing alone and engaging with objects for short periods of time repeatedly. The 4-year-olds played with their peers and continued to be absorbed in making crafts and playing with building blocks. The teachers watched over them, talked to them, and prepared the environment for them. The 5-year-olds were excited to play with their peers and played cooperatively. They were experimenting and adjusting, and their concentration and involvement were sustained. The 5-year-olds in the third trimester were planning and carrying out events on their own, and the teachers introduced them to their peers and expanded their play.

研究分野：幼児教育学

キーワード：集中没頭 社会情緒的スキル 幼児期 幼小接続期 発達の特徴 弛緩発散 自然観察 インタビュー

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現行の幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校学習指導要領等では、育みたい資質・能力の1つとして「学びに向かう力」、つまり社会情緒的スキルが取り上げられている。ベネッセ教育総合研究所(2016)は、幼児期に必要な力の1つとして「学びに向かう力」(社会情緒的スキル、社会情動的スキル)を提唱し、「自己主張」「自己抑制」「協調性」「がんばる力(挑戦、集中力、持続力・粘り強さ)」「好奇心」に関係する力とした。OECD(2015/2018)は、「社会情動的スキル」(社会情緒的スキル)を、「目標の達成(忍耐力、自己制御、目標への熱意)」「他者との協力(社交性、敬意、思いやり)」「情動のマネジメント(自尊心、楽観性、自信)」と捉えている。国立教育政策研究所では、保護者と保育者や小学校教師を対象に、同じ子供の5歳児と小学1年生の時点で、社会情緒的スキルの「育ち・学びを支える力(好奇心、自己主張、粘り強さ、自己調整、協同性)」と認知的スキルとの関連について検討し(国立教育政策研究所, 2017)、さらに幼児期(3~5歳児)の社会情緒的スキル等の変容について報告している(掘越・荒牧・田中, 2022)。

本研究では、社会情緒的スキルのうち、子供理解や保育を捉える視点の1つである「集中没頭」について着目したい。秋田(2014)は、フェール・ラーバース(Leavers, 1998)の「保育の質の自己評価ツール SICS」で提示された「安心・安定」「夢中・没頭」を引用し、教育・保育の質を決めるのは、どれだけ安心・安定しているかという「居場所感」と、学びの対象に対してどれだけ深くより長く没頭して関わり考えることができているかという「集中」であると述べている。保育プロセスの質向上を目指すためにも、「集中没頭」の視点から幼児の姿を捉える必要があると考えるが、幼児期の集中没頭する姿がどのように発達するのかについて、具体的には検討されていない。

2. 研究の目的

本研究では、幼児期(3歳児から5歳児)の集中没頭する姿を取り上げ、幼児期前後(2歳児と小学1年生)も見通しつつ、幼児期の集中没頭する姿の発達的特徴と、その姿が生起した遊び・活動場面や時期、保育者・教師の関わり等について整理して検討することを目的とする。

具体的には、1)自然観察を通して、3歳児から5歳児にかけての幼児の集中没頭する姿を縦断的に捉え、その特徴を整理する。2)インタビュー調査を通して、2歳児と小学1年生の集中没頭する姿を把握し、その前後の育ちを見通しつつ、集中没頭の発達的特徴を捉えることとする。

3. 研究の方法

1) 研究1: 自然観察

観察時期:平成30年5月~令和3年3月。途中の4歳児から5歳児にかけて(令和2年2月~5月、令和3年1月)、新型コロナウイルス感染予防対策による休園等により、保育観察を中断した。結果として、3歳児9回、4歳児8回、5歳児8回の計25回観察した。

観察対象:国立C附属幼稚園の3歳児クラスの幼児。その後進級した4歳児クラス、5歳児クラスの幼児(3歳児34名、4歳児60名、5歳児60名)。各年齢クラスの担任保育者2名。

観察方法:月1回程度、午前中に園を訪問し、3歳児、翌年の4歳児、翌々年の5歳児をビデオカメラとデジタルカメラで撮影した。幼児全員を対象とし、主に遊んでいる場面を自然観察した。保育終了後や学期末等に、保育者へ保育や幼児の様子を理解するためのインタビューを行った。分析方法:生活や遊びにおいて、幼児が主に集中没頭している場面を取り上げ、幼児や保育者が関わる事例の文字記録を作成した。集中没頭している姿について、年齢・時期、人数、場所、行動、生起した遊び場面、持続等の視点から取り上げ、その発達的特徴について整理し、保育者の援助について検討した。

2) 研究2: インタビュー調査

調査時期:令和4年3月~4月。

調査対象:ナースリー2歳児(3歳未満児)を担当する保育士、小学1年生担任教師の各1名。

調査方法:対面又は遠隔で半構造化インタビューを行った。

①担当する幼児・児童の集中没頭に関わる印象的な事例を複数挙げてもらい、印象に残った理由について尋ねた。②自然観察から得られた幼児期(3~5歳児)の集中没頭に関する事例を5事例提示し、その感想を尋ねる。③集中没頭と弛緩発散へのイメージや考えについて尋ねる。

分析方法:語られた集中没頭する事例とその感想について文字記録を作成し、2歳児と小学1年生の集中没頭の発達的特徴を整理した。また、2歳児担当と小学1年生担任による幼児期の集中没頭に関わる事例への感想や集中没頭への考え等を比較し、共通点や相違点を質的に分析した。

なお、本研究は、国立教育政策研究所の研究倫理審査委員会による承認を得て実施した。

4. 研究成果

1) 研究1: ①集中没頭の分類

集中没頭する姿が観察された事例は、3歳児で21事例、4歳児で38事例、5歳児で32事例の計91事例だった。5歳児での事例数の減少は、特に後半1事例が長くなったためと考えられる。これらの事例から、以下の分類項目を抽出して整理し、各事例について検討した。

表1 集中没頭事例の分類項目

①年齢・時期

3歳児：Ⅰ期4-7月，Ⅱ期9-12月，Ⅲ期1-3月
4歳児：Ⅳ期4-7月，Ⅴ期9-12月，Ⅵ期1-3月
5歳児：Ⅶ期6-7月，Ⅷ期9-12月，Ⅸ期2-3月

②人数・仲間との関わり

人数：1人，2人，3-5人，6人以上。
仲間との関わり：ひとり，そばにいる，一緒に遊ぶ，盛り上がる。

③場所

戸外：園庭，砂場，お山，その他，
室内：保育室，廊下，ホール，保健室/絵本部屋，その他。

④行動

感じる，触る，とる，
体を動かす，物を叩く，歌う，
作る，並べる，直す・修理する，編む，
考える，工夫する，試す・試行錯誤する，
気づく，見つける・発見する，探す，集める，
見る・観察する，数える，分類する，調べる，
読む，書く，描く，
繰り返す，続ける，真似する
説明する，話し合う，聞き取る，協力する，
計画する，進行する。

⑤遊び・活動場面

積木：ものを並べる，高く積む，きれいに並べる，
きれいに納める，
製作：遊ぶ道具やもの，人形等を作る，たくさん作る，
道具・材料を使う，三つ編み・編物をする，
砂・水・石：砂・水に触る，水音を聞く，地面に線を描く・
地面をはく，ものや泥団子を並べる，トイをつなぐ，
山を作る，水を流す，石を砕く・細かくする，
生物：虫等を捕まえる・探す・追う，虫等に触る・数える
・観察する・調べる。
植物：実・種を収穫する，採り方を考える，数える，
きれいな葉等を集める，
乗物：乗物を作る，修理する，走る，コースを作る，
ごっこ：道具・商品を作る，魚・動物等の絵を描く・作る，
なりきる，展示する，説明する，
絵本・絵・文字：絵本を読む・聴く，絵を描く，文字を
書く，手紙・お話を書く，ポスターを書く，
行事：ひな祭り・コマ大会等をする，準備する，片づける。
⑥持続時間
1分程度，2-5分程度，5-10分程度，10-15分程度，
15-20分程度，20分以上。
⑦保育者の援助
場を確保する，遊具・材料を用意する，
見守る，声をかける，認める，任せる，
一緒に手伝う，一緒に考える，
周りに伝える・紹介する，話を整理する。

②集中没頭の事例分析

【事例1】 3歳児5月（約2-5分程度×3回）園庭・砂場

A男が砂場で砂をすくい，自分の掌にさらさらかける。赤バケツを1つ持ち，白砂をすくって入れる。ベンチにまたがり，バケツから砂をすくって「砂をかけまーす」と，嬉しそうに手で握った砂を地面にさらさら落とす。途中で虫に気付いて中断するが，再び砂を落とし「白い砂を集めて」と観察者に話す。砂が無くなると，片手で砂をすくってバケツに入れる。場所を移動して砂を集めるが，N保育者に袋がほしいと話す。N保育者が小さいビニール袋を渡すと，A男はビニール袋に砂を入れて出す。再びビニール袋に砂を注意しながら入れ，水も入れる。泥水になったビニール袋をグシャッと握って水と泥を出す。水を入れては袋を押して水を出すことを繰り返す。蛇口を押さえて袋に水を入れる。園庭へ出てきたS保育者が「お山に行くよ」と皆に声をかけると，A男も水の入ったビニール袋を握ってついて行く。

時期：Ⅰ3歳児6月，場所：園庭，人数：1人，仲間：ひとり，行動：感じる/触る/集める/繰り返す，場面：砂・水・石，持続：2-5分×3回，保育者：遊具・材料を用意する/見守る。

3歳児当初，A男は一人で砂の感触を楽しむように白砂をすくってはさらさら落としていた。観察者に話しかけたり，保育者にビニール袋を要求したりするが，ビニール袋に砂や水を注意しながら入れては握って出すことを繰り返しており，出し入れや水の感触が心地よく感じて面白いようである。比較的短い集中没頭が何度か繰り返されていた。

【事例2】 3歳児2月（約5-10分程度）保育室

保育室内を広く使ったブロックや箱や布等の色々な素材を並べたコースが作られている（M男が保育者と箱で作ったビタゴラスイッチに，B男がブロックや布をつなげた様子）。B男は製作テーブルにいる保育者に，新聞紙とガムテープを出してもらい，新聞紙を丸めてガムテープを貼り付けてボールを作る。ボールができあがると，B男は嬉しそうに手に持って，スタート地点に行く。B男はコースに沿ってボールを転がしたり，ジャンプさせたりしながら「トントントーン！」と唱えながら，コースをたどっていく。「もうちょっとだ」と一周してゴール地点に到着すると，全体を眺めて「あっちから，ぐるーんと！」と満足そうに話す。

時期：Ⅲ3歳児2月，場所：保育室，人数：1人，仲間：ひとり（そばにいる），行動：並べる/作る/工夫する/続ける，場面：積木，持続：5-10分，保育者：場を確保する，遊具・材料を用意する/見守る。

観察を始めた時，保育室を広く使ったコースが出来ており，B男は保育者に手伝ってもらい，ボールを製作していた。M男とは特にやりとりなく，後半いなくなり，B男は一人で集中して，スタートからゴールまでボールを転がし，全体を眺めて喜んでた。保育室に広がったコースを作り上げたプロセスを，ボールを転がして再体験し，達成感を得ていたと考えられる。

【事例3】 4歳児7月（約15-20分程度）保育室・廊下

おやつの後，保育室に積木や板を並べ，段ボールの電車遊びを始めたC男とD男とE男。「これは急行電車ね」とD男とE男は段ボール電車で積木の上を走る。C男は積木を並べ，廊下まで長くしていく。C男は積木がなくなると，保育室から椅子を運んで並べて線路にする。D男も椅子を廊下に運ぶのを手伝う。C男は椅子が向き合うように規則的に並べている。自然とD男が椅子を運び出し，C男がきれいに並べて役割分担する。E男はダンボール電車のまま様子を見たり，積木の上を走ったりする。C男とD男の2人が協力して並べ，線路はどんどん長くなる。

途中でD男はE男と一緒に段ボール電車で椅子の上を渡り出すが、C男は嬉しそうに繰り返し保育室に戻っては椅子を探して運んで並べる。全て並べた後、C男は段ボール電車で積木の上を走り、廊下の椅子の線路は気をつけて1つ1つ渡り終えると「やった！」と喜び、廊下の端まで走ってから戻ってくる。

時期：IV 4歳児7月，場所：保育室・廊下，人数：3-5人，仲間：一緒に遊ぶ，行動：並べる/考える/探す/集める/繰り返す/続ける/協力する，場面：積木/乗物，持続：15-20分，保育者：場を確保する/見守る。

4歳児になると、仲間と協力して盛り上がりながら集中没頭する姿も多く見られるようになる。7月の事例では、C男とD男が電車遊びで積木と椅子を使い、線路を協力して作っている。C男の椅子は、規則的にきれいに並べられている。C男が集中没頭して繰り返し椅子を運び、椅子の線路を長くつなげた達成感は、渡りきった時の「やった！」という喜びに表れている。また、電車遊びの前、保育者がテーブルを片付けて場を用意したことも、遊びの展開を支えていた。

【事例4】 5歳児6月（20分以上）園庭

分散登園中。F男が長い自作の棒を用意し、保育者と一緒に夏みかんの木の実を取ろうとしている。普段遊んでいる仲間ではないG男が興味を持って近づいて、夏みかんを取るのを手伝う。F男は棒の先の針金の輪っかの形を整えて、夏みかんに引っ掛け、思い切り引っ張る。夏みかんが落ち、みんなでと喜び。F男は「次はこれ」とねらいを定め、輪っかに引っ掛ける。保育者も「いきますよ」と声をかけ、G男も一緒に引っ張ると、2個めがとれる。F男とG男は「取れました！」と大喜びする。G男は「よし行くぞ」とテーブルを移動させる。F男は「もう少しこの辺」と調整し、保育者も「力を合わせていこう」と声かける。棒が枝に引っ掛かると、F男は「形！」と棒を戻して針金の形を直す。保育者は他の女兒と一緒に応援する。輪の形を戻したり、テーブルに椅子をのせて保育者に押さえてもらったりして、二人で力いっぱい引っ張り、3個めがとれる。F男が「あっちの方が取れやすそう」とテーブルを動かす時「先生、手伝ってくれたまえ」と依頼する。最後はG男が枝付き夏みかんを取り、5個収穫する。クラスの集まりでF男は棒の工夫等を紹介し、皆で収穫した夏みかんを数えて喜ぶ。



時期：VII 5歳児6月，場所：園庭，人数：3-5人，仲間：一緒に遊ぶ/盛り上がる，行動：とる/作る/直す/考える/工夫する/試行錯誤する/探す/集める/数える/続ける/説明する/協力する，場面：植物，持続：20分以上，保育者：認める/一緒に手伝う/一緒に考える/周りに伝える・紹介する。

F男は夏みかんを取るため、長い竹の棒、Y字の枝、輪っかを作る針金を探し、工夫しながら保育者と相談して準備していた。夏みかんを採る際、針金の形を整え、引っ掛け方や引っ張る場所、引っ張り方を考えて説明し、G男と協力して力一杯引っ張っていた。F男、G男、保育者で収穫できた喜びを分かち合いながら、20分以上も集中没頭して取り組んでいた。クラスの集まりで道具や夏みかんを紹介したことで次へつながり、仲間へ広がる機会となっていた。

【事例5】 5歳児2月（20分以上）保育室

保育室に箱積木を組み立てて雛壇を作り、H子、次にF男が雛壇の上に座る。I子は「お雛様が左」と位置を指し、夏みかんを間に置く。I子は「ちょっとこのお雛様を撮ってください」と観察者に話し、画像を確認して「いいですね！」と喜び。姫のH子が「こうゆうの、ほしいな」と扇の形を示すと、I子とJ子が扇を作る。保育者が赤と青の不織布をもってくると、I子は大喜びで着物分を切り取る。<中略>いざこざで中断後、I子はH子の髪に赤と青のリボンを編み込み、「見て、この髪かわいいでしょ」と話す。次にI子は、H子に赤い不織布を羽織らせる。青い不織布は中に重ねて、苦戦しながら留める。H子も動かないようにして協力する。F男は部屋の懐中電灯を見つけて、不織布で包んでぼんぼりを作る。その後、I子に「僕の重ね着、明日お願いね」と予約する。J子はピンクの花紙で作った桃の花を枝につけている。「桃に見えるかな」「終わらないよ」と言って細々と作っている。K子は翌日の雛祭り会について「一番やりたいのは何でしょうか」等と他の仲間聞き取りをしている。また、K子はI子に尋ねて作成したチケットを3歳児に配布し招待する。最後に雛壇でお雛様とお内裏様の記念撮影をする。



時期：IX 5歳児2月，場所：保育室，人数：6人以上，仲間：一緒に遊ぶ/盛り上がる，行動：作る/編む/考える/工夫する/試行錯誤する/書く/続ける/説明する/話し合う/聞き取る/協力する/計画する/進行する，場面：製作/ごっこ/行事，持続：20分以上，保育者：遊具・材料を用意する/見守る/声をかける/認める/任せる/一緒に手伝う/一緒に考える/周りに伝える・紹介する。

雛祭りが近づいた頃、箱積木を雛壇に見立てたところから遊びが展開した。H子とF男がお内裏様となり、I子は張り切って指示を出して仕切っていた。保育者が不織布を用意したことで、着物をデザインする際も集中・没頭して取り組んでおり、H子も協力する。保育者は基本的に子供に任せ、解決が難しい時は一緒に考え、他の子に状況を伝えている。J子やK子もそれぞれ役割を見出し、雛祭り会の開催に向けてじっくりと自分のやりたいことに取り組んでいた。

③ 3～5歳児における集中没頭する姿の発達的特徴

これらの結果から、幼児の集中没頭する姿の発達的特徴は、以下のように整理された。

【3歳児】一人で楽しんだり、そばで過ごしたりして遊んでいる。身体で楽しんだり、砂・水・石

や素材等のものへ素朴に関わったりして比較的短い時間没頭し、繰り返し取り組むことが多い。保育者は、場を確保し、遊具・材料を用意し、見守りや声かけ、一緒に手伝う援助が見られた。

【4歳児】一人だけでなく仲間と一緒に遊び、時に盛り上がることもある。比較的持続するようになり、特に製作遊びや積木遊び等では、仲間と見せ合いながら、こだわって作ったり並べたりして継続していた。保育者は、場を確保し、遊具・材料を用意し、見守りするほか、認めたり、声をかけて促したり、一緒に手伝ったり考えたりする援助が見られた。

【5歳児】仲間と一緒に作り上げていく盛り上がりがあり、協同的に遊んでいた。製作遊び等ではこだわって長い時間取り組み、試行錯誤や工夫をして展開していた。仲間と役割分担し、時に保育者も巻き込みつつ、自分たちで取り組んでいた。3学期には、自分たちで行事等を計画して進行し、保育者の助けを借りながら、最後までやり遂げようとしていた。保育者は、問題や課題について一緒に考えたり、子供たちに任せたり、他の仲間伝えたり、クラスで紹介して遊びを広げる援助が見られた。

2) 研究2：①2歳児の集中没頭：2歳児担当へのインタビューと提示資料から

【事例6】1月に泥遊びの苦手な2歳女児が他児のトロトロアイスの泥を見て「やりたい」と思い、トロトロを目指して水と土の量を加減し、最後まで残って泥遊びを楽しんでいた。1ヶ月後久しぶりに登園した際、「前の作りたい」と言い、他児と一緒に水量も意識しながら作っていた。

【2歳児】安心した状況で一人やそばで過ごして遊ぶ。砂・水や粘土を無心に触ったり道具を使ったり、ブロックを工夫して組み立てたり、植物等にじっくり関わったりする。もの自体や他児の姿に心惹かれて取り組み、保育者は環境を整え、やり方を伝える等の援助をしている。

②小学1年生の集中没頭：1年生担任へのインタビューと提示資料から

【事例7】「やってみたい」から始まるグループのプロジェクト活動。11月の水族館プロジェクトで、大きな魚を作ることになる。以前難しさで立ち消えたが再燃した。180cmのバショウカジキの製作に向け、教師は「床のマス目30cmだから6つ分」と助言する。O男たちは段ボールを貼り合わせ、バショウカジキを描いて得意そうに報告する。前回完成しなかった「形を切り抜く」作業も2日で出来て、教室に大きな魚が登場した。教師は「すごいね!」と褒めるが、O男たちは無然とした表情。理由を尋ねると「R男が全部やっちゃうから」と話す。目標は達成したが、仲間と活動を進める葛藤を感じていた。3週間後に活動の進め方で揉めた際、教師が介在して互いの思いを確認する。その後みんなで話し合っ「勝手にやらない」ルール等を決める。

【1年生】興味を持った仲間と一緒に協力し、主体的に活動する。プロジェクト活動では、やりたいことのイメージが変化しつつも継続的に取り組んでいる。仲間と分担して形にしていくが、仲間と一緒に進める上で葛藤を感じて話し合ったり、成果を見てもらうために発表したりする。教師は、学びの経験を位置づけつつ、困難な場面で助言し、共有する場を用意して支えている。

③2歳児担当と小学1年生担任によって語られた集中没頭と弛緩発散

共通して挙げられたのは、「やりたい」「作りたい」思いから集中没頭が生じること、友達の姿に心惹かれたり影響を受けたりして集中没頭する場合があること、弛緩発散する姿は制約が必要だとしても集中没頭するためには大事と捉えていたことである。

相違点として、2歳児担当は集中没頭を普段は「夢中」と表現していること、3歳児事例は2歳児とつながって分かりやすく、砂・泥・水等の共通する遊びの大切さや安心できる場ならではの姿であることを細やかに語っていたが、4、5歳児事例では仲間との協力や道具の工夫等のやり方の変化について「すごい」と感心していた。

1年生担任は、子供の「やりたい」思いが形として現れたものを位置づけ直すことが大切であり、集中没頭したことを他の仲間と共有することが重要と考えていた。3歳児事例は未知の世界だが、ピタゴラスイッチは1年生でもやると述べていた。5歳児事例では共通の目的のために力を合わせる姿は1年生とほぼ同じで、道具の工夫やそれを仲間と共有する場面が大事であること、園で使える道具や素材の豊かさが小学校と大きく違うこと等を細やかに語っていた。

5. 引用・参考文献

秋田喜代美 (2014) 『対話が生まれる教室：居場所館と夢中を保障する授業』 教育開発研究所
ベネッセ教育総合研究所 (2016) 「幼児期から小学1年生の家庭教育調査 速報版」

https://berd.benesse.jp/up_images/research/20160308_katei-chosa_sokuhou.pdf (2022年6月11日閲覧)

掘越紀香・荒牧美佐子・田中祐児 (2022) 「プロジェクト研究『幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究』中間報告：幼児期の『学び・生活の力』『育ち・学びを支える力』の関連や発達の变化等」 https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r03/r040125-01_honbun.pdf (2022年6月11日閲覧)

国立教育政策研究所 (2017) 『平成27-28年度プロジェクト研究報告書「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」』

https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-5-1_a.pdf (2022年6月11日閲覧)

お茶の水女子大学附属小学校・お茶の水児童教育研究会 (2022) 『文部科学省研究開発指定(2019年度～)研究主題「学びをあむ：新領域「てつがく創造活動」を中核とする教育課程の開発』 OECD編著・ベネッセ教育総合研究所企画・無藤隆・秋田喜代美監訳 (2018) 『社会情動的スキル：学びに向かう力』 明石書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 掘越紀香	4. 巻 47(4)
2. 論文標題 「自立心」を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 幼稚園じほう	6. 最初と最後の頁 5-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 掘越 紀香	4. 巻 6
2. 論文標題 幼児期におけるふざけ行動の意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 子ども学	6. 最初と最後の頁 97-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 掘越紀香・杉浦真紀子・佐々木麻美
2. 発表標題 幼児の集中・没頭する姿の変容
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 掘越紀香
2. 発表標題 OECD幼児教育調査から見えてきたこと：社会情動的スキル，wellbeing等
3. 学会等名 日本乳幼児教育・保育者養成学会第1回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 掘越紀香・杉浦真紀子・佐々木麻美
2. 発表標題 幼児における集中没頭
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 神長 美津子, 掘越 紀香, 佐々木 晃, 齊藤 多江子, 佐川 早季子, 和島 千佳子, 宮里 暁美, 山下 文一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 光生館	5. 総ページ数 184
3. 書名 保育内容 環境	

1. 著者名 無藤 隆, 掘越 紀香, 丹羽 さがの, 古賀 松香, 川崎 徳子, 青山 昌子, 齋藤 久美子, 佐久間 路子, 野田 淳子, 荒牧 美佐子, 安藤 智子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 光生館	5. 総ページ数 168
3. 書名 子どもの理解と援助	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------